

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる学びの芽を捉える

— 「自然との関わり・生命尊重」の姿に視点を当てて—





目 次



- ◆ はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- ◆ 身近な自然とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- ◆ 事例の見方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- ◆ 実践事例 幼児教育の事例
 - 事例① 3歳児 「虫探しに行くぞ!」・・・・・・・・・・・・・・ 4
 - 事例② 4歳児 「パパに見せたから、アゲハ、お外に逃がしてあげたの」・ 6
 - 事例③ 5歳児 「だめだめ、ツバメがいっぱいいる」・・・・・・・・・・・・ 8
 - 事例④ 5歳児 「カブトムシ、ごめん。守ってあげられなくて」・・・・・・・・ 10
 - 事例⑤ 5歳児 「カラス、近寄ってこないよ。この作戦、大成功!」・・・・ 12
- ◆ 参考事例 小学校教育の事例
 - 1年生 「きっと、木が水を飲んでいるんだよ」・・・・・・・・・・・・ 14
- ◆ おわりに
- ◆ 参考資料
 - 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿・・・・・・・・・・・・・・ 16
 - ～ 平成30年度愛知県幼児教育研究協議会リーフレットの研究内容はこちらです～
<https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/297470.pdf>

「あっ、ありさんだ!」



「どこに行くのかな…」

◆ はじめに

愛知県教育委員会では、昨年度「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（「10の姿」）に着目して、園と家庭等が幼児期に大事にしたいことを共通理解するためのリーフレットを作成しました。ここには園と家庭等が同じ目線で子供を理解し、見守り、育ちを支えていく手掛かりとなるように簡略な具体例が一覧となって示されています。「10の姿」のそれぞれの項目について具体的に詳細に示してほしいとの御要望にお応えして、本年度は昨今、危惧されている「自然との関わり・生命尊重」について取り上げ、お示しすることにしました。



近年、都市化が進み環境が変化したことにより、子供たちが自然と触れ合う機会や命の大切さについて体験的に学ぶ機会が減少しています。生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期である幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然に触れて遊ぶ中で、その大きさ、美しさ、不思議さに心を動かされながら、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力等の基礎が培われていきます。また、植物や虫などの身近な生き物と関わることを通して命を感じ、生命の尊さに気付き、生命を大切に作る気持ちが高まっていきます。

保育者は子供たちが**身近な自然**（「◆身近な自然とは」参照）に関わり、豊かな体験ができるよう、意図的、計画的に環境を構成することや、幼児期の学びを小学校以降の教育に見通しをもってつないでいくことが大切となります。

また、子供が見つけた「不思議なこと」や、様々な事象や出来事に対する「好奇心」が家庭での体験にもつながるよう働きかけていくことも必要です。園で経験したことが家庭での体験に重なり、双方が循環して、子供の学びの連鎖がより深まるように仕向けていくのも保育者の重要な役割だと思います。

本事例集では、園での具体的な場面の子供の姿から、主体的に身近な環境に関わり、遊びを広げたり、深めたりする体験を通して、「自然との関わり・生命尊重」の学びの芽を捉え、他の9つの姿と関連しながら育まれていくことや、姿を生み出す環境の構成や援助の在り方を示しました。

子供理解や現場での保育実践、子育て等に活用していただくことを願っています。

◆ 身近な自然とは

子供の身の回りにある身近な自然には例えば次のようなものがあります

昆虫（チョウ、カブトムシ、バッタ、トンボ）、小動物（ザリガニ、サワガニ、カメ、カエル、メダカ、キンギョ、ウサギ、リス、ハムスター、小鳥、カラス、ツバメ、ハト）、木、草、木の実、木の葉、風（強さ、心地よさ）、雲（色、形）、空、星、虹、様々な生き物が生きるために昆虫や植物を食べて生きていること、誕生、死 ほか

※今回の事例集では下線の事柄に着目して示しています。

幼児期には次のような自然体験をしながら成長していくことが望ましいと考えます

- 身近な自然の美しさや不思議さに触れる体験
- 感動する体験
- 自然の変化を感じ取る体験
- 興味や関心をもち、好奇心や探究心を抱く体験
- 考えたことを自分なりの行動や言葉などで表現する体験



次のような体験の積み重ねを通して次第に自然への愛情、畏敬の念をもつようになります

- 身近な自然や偶然出会った自然の変化に気付く
- 必要に応じて遊びに取り入れる
- 保育者や友達・保護者の関わりによる新たな気付きや体験のつながり
- 体験の繰り返しにより興味や関心が深まる



◆ 事例の見方

事例〇 「 タ イ ト ル 」

〇歳児 〇月

事例の背景となる事柄・・・・・・・・

<子供の姿>

身近な自然に関わり遊ぶ姿

保育者が着目したポイントとなる具体的な姿

子供が自然と関わる様子から、表情や視線、しぐさや言葉などに着目し、「学びの芽」を読み取る。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

子供の姿からつながる主な
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

事例を通して育まれている【自然との関わり・生命尊重】の姿

事例の姿を生み出した環境の構成と援助の在り方

◆ 環境の構成

経験に必要な遊具や用具、素材等

◆ 保育者の援助

取組の深まりにつながる援助等



事例①「虫探しに行くぞ！」

3歳児 7月

園庭の一角にある花壇で、毎日のように年中児たちが、ダンゴムシ探しに夢中になっていた。年中児の後を付いてダンゴムシ探しをする姿を見ていた年少児のA児とB児は、年中児と同じようにダンゴムシ探しを始めた。



保育者が着目したポイントとなる具体的な姿

保育室から空の虫かごを持ったA児とB児は、C児とD児と一緒にプール横の花壇に向かって一列になって歩いていた。

A児がテラスにいる保育者の方を向くと

「虫探しに行くぞ！」と言って、にこにこしながら、右手を高らかに挙げた。



後ろにいた3人もA児と同じように軽快な足取りで歩いた。花壇に着き、その場にしゃがみ込んだB児は

「何かいないかな。」とつぶやくと、「出ておいで。」と口に両手をあてて、一生懸命に花壇に向かって呼び掛け始めた。



「どこにいるのかなあ。」と保育者がつぶやき、A児たちの近くにしゃがみ込んで花壇をのぞき込むと、

「えさだよ。」とC児が言いながら草を1本引き抜き、左右に振り始めた。

「ダンゴムシは草が好きなのね。」と保育者がC児に言うと、

「うん。」と笑顔でうなずいた。

C児を見ていたB児は、草の中に手を入れて虫を探し、A児は、手あたり次第に草をむしり取り、虫かごに入れ始めた。



「学びの芽」の読み取り

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

前日にダンゴムシを見つけた体験から、花壇に虫がいるのではないかと予想してワクワクしながら出かけている。

昨日からの見通しをもって、環境（花壇）へ自分から働きかけている。

【自立心】
【健康な心と体】

ダンゴムシがあたかも自分と同じように言葉が聞こえていると感じ、呼び掛けている。3歳児らしい虫への関わり方が感じられる。虫への親しみの気持ちがあふれている。

【豊かな感性と表現】
【自然との関わり・生命尊重】

草は、ダンゴムシの本当のえさではないが、親しみを感ずるダンゴムシに何とか出て来てほしいという、ダンゴムシになったつもりで考えようとしている。

【思考力の芽生え】

へえ～、ダンゴムシってこんなところにいるの…。草を食べるの？ ママにも教えてね。



虫かごに入れた草がいっぱいになると、A児が「何もいないね。」とつぶやき、B児が「そうだね。」と言って、2人は顔を見合わせた。

「また明日、来ようか。」とA児が言うと、B児は笑顔で「そうだね。」と言った。

「先生見て。」とA児は言いながら草でいっぱいになった虫かごを保育者に見せた。



「うわ～、いっぱいだね。」と保育者が言うと、A児は「何もいなかったの。また行くんだ。」と誇らしげに言い、4人は足早に歩いて保育室に戻っていった。

今日楽しかったことを明日もしてみたいと、明日への期待をもち、言葉を交わしている。

【言葉による伝え合い】

ダンゴムシは見付からなかったが、花壇には虫がいるのではないかとわくわくした体験、その気持ちを周りの子と一緒に楽しんだひととき、そのうれしい感情が、虫が捕れなくても満足した気持ちを生み出している。

【自立心】
【道徳性・規範意識の芽生え】

ダンゴムシを自分にとって身近な虫として、親しみを込めて関わろうとしている。目にはできなかった虫と対話したり、周りの幼児と一緒に探した喜びを感じたり、また、明日、ダンゴムシに会いたいという期待感をもったりしている。

【自然との関わり・生命尊重】

事例の姿を生み出した環境の構成と援助の在り方

◆ 環境の構成

- ・ ダンゴムシ探しを通して、友達と一緒に過ごす楽しさが味わえるように、虫の住みかになりそうな場所をつくり、多様な関わりを楽しむことを通して身近な生き物に関心をもつ体験につないでいく。
- ・ 身近な生き物に出会い、直接見たり、触れたりすることができるよう、安全に配慮した環境を園内に整え、「出ておいで」と呼びかけたり、草を振ったりするなど、自分なりに思い付いたダンゴムシの捕まえ方を満足するまで繰り返すことのできる時間を保障する。

◆ 保育者の援助

- ・ 興味のあることにじっくりと関わられるよう、保育者はダンゴムシが見付からない残念な気持ちを受け止めたり、一緒に探したりして子供の気持ちに寄り添いながら、子供のありのままの動きや言葉を受け止め、自分なりに生き物に関わろうとする姿を認めていく。
- ・ どうして虫が捕まらないのかという不思議さや、どうしたら捕まえられるかという好奇心から、自分なりにダンゴムシに関わろうとする姿を認め、心行くまで繰り返すことができるように援助していく。また、虫の代わりに草を集めて気持ちを切り替えようとする子供の気持ちの動きに応えていく。

保育室前で育てているラディッシュの葉にモンシロチョウが卵を産み付け、保育室の前にモンシロチョウがたくさん飛ぶようになった。虫に興味があり、いろいろな虫を捕まえないA児は毎日ラディッシュのプランターの前で様子を見ていた。



保育者が着目したポイントとなる具体的な姿

「学びの芽」の読み取り

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

ラディッシュを覗き込んでいたA児は、モンシロチョウがラディッシュに止まると、そうっと手でチョウを捕まえた。「すごい！」と周りにいた友達に言われ、A児はとてもうれしそうに誇らしげな表情になった。

モンシロチョウが羽ばたくと、自分と同じように友達が喜ぶと思い、どうしたら羽ばたくか考え、ふさわしい方法とは言えないが、自分なりのやり方で試行錯誤をしている。

【思考力の芽生え】

虫かごに入れると友達に「見て、見て。」と見せて回った。モンシロチョウが虫かごに止まり動かないと、羽ばたく様子を友達に見せたくて、虫かごを何度も揺すった。

そのせいか、降園前には、モンシロチョウは弱ってしまい羽が破れていた。B児が

「Aちゃんが虫かごをいっぱい揺すったからだよ。」とつぶやくと、周りのみんなも「チョウチョさんかわいそう。」と口々に言っているのを聞いて、A児は押し黙っていた。

チョウの羽が破れた様子を見て、初めて羽のもろさを感じ、かごにぶつかるチョウを見て羽を心配している。

【自然との関わり・生命尊重】

翌日、A児は弱っていたモンシロチョウが虫かごの中で死んでいるのを見付け、モンシロチョウの墓を作った。



数日後、虫取りのこつをつかんだA児は、アゲハチョウを手で捕まえ、大喜びで保育者に見せに来た。

「見て！ぼくが捕まえたの。」うれしくてみんなに見せたいA児は、アゲハチョウを入れた虫かごを何度も揺すり始めた。

「そんなに動かすからアゲハがかごにぶつかっているよ。かわいそう…。」と横にいたB児が

つぶやいた。A児は、しばらくじっと虫かごの中を見ていたが、園庭に咲いていた花をつむと、かごの中に入れた。



チョウの死に直面した体験から、かごにぶつかっているアゲハチョウの羽のもろさも心配している。

命の大切さを感じながら、自分なりの考えや気付きを、言葉や言葉にならない行動で伝えようとする。

【言葉による伝え合い】

そして、
「パパに見せてあげる。」とつぶやいて、首にぶら下げたかごを両手で支え、揺れないよう大切に持ち帰った。

ねえパパ、ほくね、幼稚園でアゲハ捕まえたんだよ！死んじゃうとかわいそうだから、パパに見せたら逃がしてあげるんだ。



おっ！A児、アゲハを捕まえたのかすごいな。そうだね、元気うちに逃がしてあげようか。

翌日、空の虫かごを持ってきたので、保育者が「昨日のアゲハはお家で飼っているの？」とA児に聞くと「パパに見せたから、アゲハ、お外に逃がしてあげたの。」と答えた。

アゲハチョウがかごにぶつかっているという友達の言葉を聞き、チョウの扱い方を考え、かごを揺らさないようにして持ち帰ろうとしている。

【思考力の芽生え】

虫取りによく連れて行ってくれる父親にアゲハチョウを見せたい気持ちを感じたり、自分の行動を振り返り行動したりしている。

【社会生活との関わり】
【道徳性・規範意識の芽生え】

美しく羽ばたくチョウの魅力を感じる幼児が、羽ばたかせたいと動かしたことにより、予想外にも、羽のもろさとチョウの命の重さを感じる事となった。子供はこうした、時には心の痛みを伴いながら命の尊さを感じていくことも多い。だからこそ、大好きな家族に見てもらった後、自分から判断して、逃がすことができたのであろう。

【自然との関わり・生命尊重】

事例の姿を生み出した環境の構成と援助の在り方

◆ 環境の構成

- ・ 自分たちで世話ができるよう、保育室前にラディッシュのプランターを置き、子供たちとラディッシュを育てながら、気付いたことや考えたことを話したり、聞いたりする場や時間をつくる。
- ・ 親しみや愛着の気持ちにつながるように、集まってきたモンシロチョウやアオムシ等を子供と一緒に捕まえ、その場で虫の様子が見られるように虫かごや飼育ケースを用意する。
- ・ 保育者が子供たちの考えや気付いたことをよく聞いたり、共感したり、取り上げたりして、思ったことが言い出しやすい雰囲気をつくる。

◆ 保育者の援助

- ・ 「羽ばたくところを見たい」というA児の興味や好奇心と、「チョウがかわいそう」という友達の思いに触れる経験をする中で、チョウを大切に扱おうと変容していくA児の感じ方や言動を受け止め、4歳児なりに身近な生き物の命の尊さに気付き、大切にしようとする気持ちを育てていく。
- ・ 捕まえたチョウを父親に見せたいという思いを受け止め、園での飼育にこだわらず、家庭に持ち帰るようにするなど、本人の思いや、園と家庭のつながりを大切に対応していく。

園庭で草取りをした際、ビオラについていたツマグロヒョウモンチョウの幼虫を飼育ケースに入れておいたら、次々とさなぎになり、子供たちはどのようなチョウになるのか楽しみにしながら毎日見ている。



保育者が着目したポイントとなる具体的な姿

飼育ケースのふたにぶら下がっているさなぎを見て

「ゆらゆらしてる。」

「きらきらしてる。(背中に金色の点がある)」など、さなぎになってからの細かい変化に気付く子供もいた。

A児は図鑑を広げ

「これはオス。」

「メスは白いところがあるんだよ。」

と興味をもって集まってくる子供に知っていることを話し、伝えたいことを図に表していた。



「どこに逃がす？」子供たちは、今日羽化したチョウをどこに逃がすか話し合った。

「テラスで逃がそうよ。」という意見が出てきたが、テラスにはツバメが巣を作っていて、逃がしたとたん捕獲されてしまう。見に行った子供が

「だめだめ、テラスにはツバメがいっぱいいる。」と大きな声で皆に伝えた。

「ツバメがいないところは？」

「北園庭！」と意見が一致し、

園舎で隔てられている北側で逃がすことになった。



しばらく後で、B児が

「あれ、チョウチョみたい。」とテラスの黒い物を指した。

「もしかして昨日のチョウチョ？」と心配になり見に行った

B児は

「羽が半分ない！」と叫んだ。

「このチョウどうしたのかな。」と保育者が言うと

「ツバメに食べられたんだ。」「食べないで。」と頭上のツバメの巣に向かって叫ぶ子もいた。

「ツバメのお母さんも赤ちゃんが待っているから一生懸命なんだね。でもチョウチョはやめてほしいね」と保育者はつぶやいた。

「学びの芽」の読み取り

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

毎日見ている幼虫が、さなぎに変化する様子に、驚きや好奇心、興味を感じ、積極的に関わることを通して、新たな発見につながっている。

より詳しく知りたいと思うことを図鑑で確かめたり、友達に尋ねたりして、身近にあるものや人から必要な情報を取り入れている。

また、図鑑を見る友達の姿に刺激を受けて集まり、愛着のあるさなぎの成長を楽しみにして、いろいろな考えを言葉にししながら、どこに逃がすと安全か予想したり、実際に見て確かめたりするなど思いを巡らせている。

【思考力の芽生え】
【社会生活との関わり】
【言葉による伝え合い】



園庭へチョウを逃がしにいくとツバメが数羽舞っていた。子供たちは手をぐるぐるまわしながら走り回り、最後の一羽がいなくなると

「よかった。」「もう北園庭に来るな。」とツバメが飛んでいった方向に向かって叫んだ。

「これで安心して逃がせる。」とA児が言い、飼育ケースのふたをあけるとチョウは元気よく飛び立った。

「バイバーイ。」

「ツバメが来たら逃げるんだよ。」と子供たちはチョウに手を振った。



チョウの成長を目の当たりにして、生命の不思議さ、尊さを感じている。大切なチョウがツバメに食べられないかと心配しながら、身の回りの自然について関心をもち、みんなで考えた安全な場を確かめたり、羽化したチョウが飛び立つのを見届けたりして、命のあるものとして大切に扱おうとしている。

【自立心】【協同性】
【豊かな感性と表現】

飼育した幼虫がどんなチョウになるのか予想する楽しさや、羽化したうれしさを友達とともに感じている。チョウを自然に帰すという目的に向けて、園のどこに逃がすと安全かなど、成長を見守ったチョウへの関心が高まり、自分の知っていることや考えを言葉で伝え、命のあるものを大切にしようとしている。

【自然との関わり・生命尊重】



ツマグロヒョウモン
チョウの幼虫だよ。
すごいでしょ！



ええっ！
それって触っても
大丈夫なのお？

平気だよ！ママも触ってみて。
ゴムみたいに柔らかいんだ。

事例の姿を生み出した環境の構成と援助の在り方

◆ 環境の構成

- ・ 子供がじっくりと見て、時間の経過による変化や、仲間の生き物でも個体による違いに気付くことができるよう、生き物が見やすい飼育ケースや飼育に必要なものを整え、継続して観察ができる飼育環境をつくる。
- ・ 疑問に思ったことをすぐに調べることができるように図鑑を用意したり、発見したことを掲示したりする場をつくる。
- ・ 子供同士が互いに自分の知っている情報を取り込み合えるように、情報を取り上げたり、伝え合う場や話しやすい雰囲気をつくったりする。

◆ 保育者の援助

- ・ 子供のつぶやきに耳を傾けたり、子供の視線に合わせて目を凝らしたりして、生き物と対面しながら、細かな気付きを受け止めていく。
- ・ 生態や飼育の仕方などの知識や情報を得ることを心掛け、互いに知っていることを伝え合う仲間の一員となっていく。また、子供が気付かない生き物同士の関係性についても、子供自身の体験に重なるような言葉に変えて伝えていく。



6月中旬に、母親と卵から育てたカブトムシを三匹持って来たA児が、飼育の仕方や扱い方等を友達や担任に伝えながらクラスで飼育していた。

保育者が着目したポイントとなる具体的な姿

A児は、自分が卵から育てていたことから思い入れがあるようで、友達がエサを多く入れていると

「ゼリーは一日一個でいいですよ。」「小さい^つ角を持ちます。」など、知っていることを友達や担任に知らせたりした。担任もカブトムシのことはA児に聞くようにした。

7月上旬の月曜日。金曜日に弱っていたカブトムシが一匹死んでいた。A児を始め、集まった子供たちは、動かないカブトムシを見たり、触れたりして、

「たくさん動いてたから天国行っちゃった。」とA児が言うと「それ、弱ってたやつだ。」とD児がつぶやいた。「ねえ、カブトムシ死ぬとき手クロスしてる。」などとB・C・D児が言い出し、一人一人が自分なりの捉え方で死について考えているようだった。

しばらくするとA児が「砂掘ってお墓に入りたい。『ここは踏まないようにしてください。カブトムシの死んだのがあります』からって書いておく。」



と言い出した。保育者は「そうだね。どこにする？」と受け止めた。これまでカブトムシによく関わっていたB・D児と保育者が、A児と一緒に園庭のドングリの木の下に穴を掘、そっと入れた。



A児は、保育室に戻ると、「カブトムシごめん。守ってあげられなくて。おかあちゃーん。」と泣き出した。

悲しかった…お墓作ったよ

「学びの芽」の読み取り

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

カブトムシの飼育を楽しんでいると感じて、自分の気持ちや思いを友達に伝えている。知っている情報を伝えたり、友達や先生に聞いてもらったりすることにより、人の役に立つ喜びを感じている。

【社会生活との関わり】
【言葉による伝え合い】

カブトムシが、どうして死んだのか、これまでの様子と自分なりの考えを結びつけながら予想したり、判断したりしたことを言葉で伝え合っている。ピクリとも動かなくなったカブトムシから生命が消えていくのを感じている。

餌やりや、飼育ケースの掃除をする中で、カブトムシへの愛着が高まり、墓をつくり弔おうとしている。大切に育てたカブトムシを傷つけない思いから、墓の目印を皆で考え合い、文字があると伝わりやすいことに気付き、文字による表示を活用している。

【自立心】
【思考力の芽生え】
【言葉による伝え合い】
【数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚】



A児にとってカブトムシの死はとても大きなできごとだったのだろう。保育者は、「お母ちゃんにも話そうね。」と声を掛けた。B児は黙ってA児の頭をなでていた。

「死んだカブトムシどこ？」カブトムシを埋めたことを知ったE児が、A児に聞いた。A児がE児をドングリの木の下に連れて行くと、E児は埋めてあるところを掘り始めた。

「掘らないで。」とA児は手で止めたり、埋め返したりするが、E児は掘るのをやめなかった。しばらくしてA児は考えるような表情をしてから自分で掘り始めた。

近くにいた保育者にどうして掘るのか聞かれたA児は

「Eちゃんたちに見せるから。」と言った。

土の中から黒い物が見えた。

「Eちゃん、もう動かなかったでしょ。死んじゃったから。」とA児がつぶやくと

「そうだね、死んじゃったんだね…。」

とE児が言った。

A児はこう言いながら、自分のことも納得させているようだった。



大切にしていたカブトムシが死んで悲しむ友達の気持ちを感じ、なぐさめようと、優しく頭をなでるなど、自分なりの表し方で寄り添い、気遣っている。

【道徳性・規範意識の芽生え】

止めても墓を掘り続けるE児の姿には、カブトムシの死を自分の目で直接確かめたいという強い思いが表れている。E児の思いを受け入れたA児は、土を掘り返し、手をクロスしたまま動かないカブトムシを見せ、自分の思いを言葉にして友達に伝えようとしている。

【道徳性・規範意識の芽生え】
【思考力の芽生え】
【言葉による伝え合い】

卵から育てたカブトムシの死は、生命の誕生や終わりに遭遇する体験となり、実感を伴って生命の大切さを感じるものとなっている。死との対面は、生命の不思議さや尊さを自分なりに感じながら、カブトムシをいたわり、大切にしたい気持ちにつながっている。

【自然との関わり・生命尊重】

事例の姿を生み出した環境の構成と援助の在り方

◆ 環境の構成

- ・ 家庭でカブトムシの飼育などを行っている子供の体験を生かして、友達と考えや方法を伝え合いながら、主体的に餌やりや掃除などの世話ができるような飼育環境を整える。
- ・ 5歳児では、命のつながりの中で子供たちが様々な発見や気づきを重ね、その生き物に対する深い思い入れや、愛（いと）おしさ等の育みにつながるように、卵からふ化まで継続して世話をしたり、変態を見届けられたりする飼育物を取り入れていく。

◆ 保育者の援助

- ・ カブトムシの飼育を通して得られる様々な教育的価値を理解し、保育者自身が日頃から飼育物に対して興味をもって関わったり、愛情をかけて接したりする姿を示していく。
- ・ 子供がそれぞれの思いでカブトムシに関わり、自分の見方・考え方を通して学んでいる姿に対して、一人一人の思いや気づき、動き出そうとする姿を尊重し、共感したり、一緒に考えたり、動いたりするなど、子供の心の動きに対して柔軟な応じ方をしていく。



子供たちが5月の連休明けに園庭の畑にナスの苗を植え、生長を楽しみにしながら水やりや草取りなどの世話をしていた。ナスの実が10cmほどになり、収穫を試みみんなで食べることを心待ちにしていた。

保育者が着目したポイントとなる具体的な姿

この日、ナスに水やりをしようとしたA児が異変に気づき「大変！ナスがなくなっている！」と叫んだ。

ヘタだけが残し、実がなくなっているのを見たA児は、慌ててB児を呼びに行った。その様子を見て、クラスの間も集まってきた。



かじられた跡やその大きさを見て「誰が食べたのかな。」

「どうやって、食べたんだろう。」

「かじったんじゃない？」と思い思いに気付いたことを言い出した。

「みんなの気が付いたことを部屋に戻って、一緒に考えてみようか。」と保育者は言葉を掛けた。



保育室に戻ると

「園庭で遊んでいるとき、電線にカラスがいるのを見たよ。」

「じゃあ、カラスが食べたんじゃない？」

「前から狙っていたのかもしれないね。」

「やっぱり、カラスだよ。」と、次々に意見が出て、周りの子はうなずきながら聞いていた。カラスに食べられないように、これから収穫する野菜を守るためにはどうすればよいか、何か良い方法はないかみんなで考え始めた。

子供たちからは

「家の近くの畑にきらきらするテープが付けてあるのを見たよ。」

「カラスが来ないようにCDをぶら下げるって、おじいちゃんが言っていた。」

「鳥の羽を付けると、他の鳥がいると思って近づかないって。」など、様々な意見が出て、早速やってみることにした。

「学びの芽」の読み取り

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

大切に育ててきたナスの異変に一目で気付いている。一緒に育ててきたみんなにとって共通の驚きや疑問となり、自分の考えを積極的に言葉で表現している。

【言葉による伝え合い】

園や近くの畑を見たり、栽培の仕方を地域の人から聞いたりする体験を重ねることは、栽培に対して好奇心をもって積極的に関わる姿につながっている。園の畑と比べたり、身の回りの出来事に結び付けて情報を出し合いながら、ナスを食べられないように考えたり、予想したり、新しい考えを生み出したりしている。

【社会生活との関わり】

【思考力の芽生え】

【言葉による伝え合い】

カラスよけ！？
いろいろなことを
考えられるように
なったのね…



このCD、もう使わないから、
保育園に持って行っていいよ。

翌日、子供たちは、「お母さんに聞いたらいって言った。」と家で使わなくなったCDや、登園途中に見つけた鳥の羽を持ち寄り、ナスが植えてある畑の上に張ったロープに取り付け始めた。

「これで、カラス来ないかな。」

「ぴかぴかだから、きっとびっくりするよね。」と言いながら、それぞれの持ち寄ったものをしっかり取り付けた。



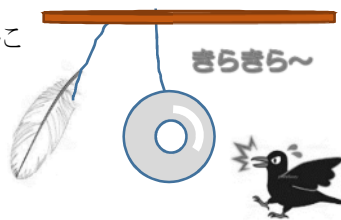
取り付け終わった子供たちは、電線に留まっているカラスをじっと見ていた。

園庭に下りてこないのを見て、

「カラス、近寄ってこないよ。」

「この作戦、大成功！」とバンザイしながら喜び合う中、C児が

「カラスも食べる餌がなくて、困っていたのかな。」とつぶやいた。



「栽培物を守る」という共通の願いや目的の共有、共感する友達の存在は、一緒に目的に向かう姿につながっている。一緒に取り組む楽しさや、予想したことが実現する喜びが育まれている。

【自立心】
【協同性】

自分がカラスだとしたらどうかと、カラスの立場に立って考えを巡らせている。生き物へのいたわりの気持ちが芽生えている。

【道徳性・規範意識の芽生え】

毎日の世話を通して栽培物に心を寄せる気持ちから、その生長への思いを巡らせ、様々な発見をするなど、自然に対する探究心を高めていく。収穫して食べることを楽しみにしている子供たちは、大事なナスを守ろうと気付いたことや考えたことを伝え合い、必要なものを集めて試すなど関心をもって育てようとしている。

【自然との関わり・生命尊重】

事例の姿を生み出した環境の構成と援助の在り方

◆ 環境の構成

- 夏野菜の苗を植え、世話をして育てる中で、野菜が生長する変化や親しみ、喜びや感動、収穫への期待感など様々な経験や次の体験につながる機会を意図的に設ける。
- ナスの異変やその原因等の解決を急ぐのではなく、子供たちで考えたり、話し合ったり、試したりする場をつくり、自分たちの考えが実現できるようにする。
- 子供たちのアイデアや考えを生かせるように、自分たちで必要なものを持ち寄ったり、集めたり、それらを使って試したりできる場を用意する。

◆ 保育者の援助

- 友達同士で思いや考えを出し合うのを見守り、アイデアが出てくるのを待つようにしていく。子供たちが調べてきた情報を取り上げ、周りに伝えていく。
- 自然の中には、突発的な出来事も多々起きてくることを取り上げたり、命のあるものにとって「生きる」ことや「食べる」ことは、どんな意味があるのか等、子供に問い掛けたりして保育者も仲間の一員となって考えていく。

「きっと、木が水を飲んでいるんだよ」

小学校1年 6月

幼児教育を終えて、小学校に入学した子供たちは、1年生の6月、生活科「自然を使った遊び」の単元の取組で、次のような素敵な姿を見せた。

教師が着目した姿

「自然を使った遊び」の計画を話し合うとき、「木登り！」の声が上がった。しかし、学校のルールでは木には登ってはいけないことになっていた。そこで、子供たちは、

「生活科の勉強で木登りがしたい。」と校長先生に相談に行った。

「絶対にけがをしないと約束できるならいいよ。」と校長先生から言われた子供たちは、自分たちで安全に登るためのルールを考えた。そして木登りの授業の中で様々な発見をしたことを伝え、校長先生の下承を得た。

梅雨の合間、雨上がりのよく晴れた日だった。イロハモミジの木に登って遊ぶ子供たちの中で、木の枝に頬を付けて全身でしがみついていた子が、



「木の中で何か音がする。」と言い出した。教師も木の幹に耳を付けてみた。

「ゴゴゴ・・・ザザザ・・・」という川が流れるような音が幹の中で響いている。前日まで降り続いていた雨を、木が勢いよく吸い上げる音だった。

「本当だ。すごい発見だね！」と教師が声を上げると、他の児童も次々に集まってきて木の幹に耳をぴったりと付け、

「本当だ！聞こえた。」

「木の声だよ。」

「きっと、木が水を飲んでるんだよ。」

などと、口々に自分の感動を言葉にした。

自然の遊びに浸る中で、一人の子供が発見したことを教師が他の子供に広げ、驚きや感動を共有する場をつくるなど、幼児期の遊びを通して育まれてきたことを小学校入学当初の生活や学習に生かす工夫が、幼児期の教育・保育と小学校教育との円滑な接続を促すことになり、科学的な見方・考え方も含めた学習へとつながっていく。

学びへのつながり

幼児期の【自立心】の育ちが「木に登りたい」という気持ちの実現に向け、どのように行動したら良いかを児童自ら考える姿へとつながっている。

幼児期に育まれた【道徳性・規範意識の芽生え】が、けがをしないように、自分たちで木登りのルールを考える【道徳性・規範意識】の姿へと表れている。

木の中で音がするという、一人が偶然発見した事象を全員が共有することで、驚きや感動を共感している。感じたことを伝え合うことで、更に様々な言葉が生まれており、幼児期の【言葉による伝え合い】の育ちが、更に豊かになっている。

五感を使って木の幹に直（じか）に触れることで、自然の不思議さを感じ、感じた気持ちを思い思いに表現するなど幼児期の【豊かな感性と表現】が更に広がっている。



◆ おわりに

幼児教育・義務教育関係の方へ



子供は園や学校での生活において、一つの遊びや活動から、様々なことを体験し学んでいきます。子供の育ちを生活や遊びの実践の中からどのように読み取るかが大切であり、子供の遊びや活動から育つものを教師や保育者がどれだけ見取ることができるかが大切です。

身近な自然に触れる中で、子供が何に心を動かしているのか、体験を通して感じていることや考えていることは何かを日常の子供の姿をよく見ていきましょう。

そして、幼児教育関係者は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から育ちつつあるものを具体的に捉え、幼児期に育んだ学びの芽を小学校へ丁寧に伝え、義務教育関係者は学びの芽の理解に努めていきましょう。

保護者の方へ



自然と関わる機会が減少している現代だからこそ、園や学校では自然との出会いを大切にしています。動植物との出会いの中で、驚き、不思議さが好奇心や探究心を引き出し、新たな疑問を生むなど、感動体験が心を動かすプラスの循環となり、学びを深めていきます。

時には生き物の死に直面する体験もあり、悲しい気持ちに心が震えることもありますが、この体験が、次第に命の大切さ、生きているものへの畏敬の念へとつながっていくことでしょう。

私たち大人は、子供のつぶやきに耳を傾け、発見や驚き、美しさ、不思議さなどを共に楽しみ、豊かな感性を大事にしていきましょう。このような実体験の積み重ねが、命の大切さ・生きることのすばらしさを知る機会につながります。

「どんぐりにもいろいろな
名前があるんだね」



「こ、な、ら」って言うんだ。」

◆ 参考資料

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

項目	姿
健康な心と体	園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
言葉による伝え合い	保育者や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

平成30年度愛知県幼児教育研究協議会のリーフレットもあわせて御覧ください。

<https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/297470.pdf>

令和元年度 愛知県幼児教育研究協議会 委員名簿

(順不同 敬称略)

会 長	津金美智子	名古屋学芸大学教授
副 会 長	鈴木照美	愛知教育大学講師
委 員	太田武司	前刈谷市教育委員会教育長
委 員	金原宏	刈谷市教育委員会教育長
委 員	加賀幸一	名古屋市教育委員会指導部指導室 指導室長
委 員	松原美栄子	名古屋市子ども青少年局保育部 主幹
委 員	杉浦真由美	西尾市子ども部保育課 主幹
委 員	石川治代	愛知県国公立幼稚園・こども園長会 会長 (刈谷市立かりがね幼稚園長)
委 員	水越省三	愛知県私立幼稚園連盟 副会長 (葵名和幼稚園長)
委 員	伊東世光	愛知県社会福祉協議会保育部会 部会長 (名古屋市 天使保育園長)
委 員	宇都宮美智子	名古屋民間保育園連盟 副会長 (名古屋市 中村保育園長)
委 員	田中あゆみ	豊橋市立牛川小学校長
委 員	陸田俊邦	愛知県国公立幼稚園・こども園PTA連絡協議会 会長 (名古屋市立第一幼稚園)
委 員	高柳彬子	愛知県私立幼稚園PTA連合協議会 会長 (聖マリア幼稚園) 【前期】
委 員	早川みどり	愛知県私立幼稚園PTA連合協議会 会長 (青山幼稚園) 【後期】
委 員	高橋浩美	一宮市立起保育園保護者の会 会長
委 員	野口幸夫	愛知県福祉局子育て支援課 課長
委 員	久保見順	愛知県県民文化局県民生活部学事振興課私学振興室 室長

令和元年度 愛知県幼児教育研究協議会 専門部会委員名簿

(順不同 敬称略)

部 会 長	鈴木照美	愛知教育大学講師
専門部会委員	和田直子	岡崎女子大学講師
専門部会委員	大主香	名古屋市立大幸幼稚園長
専門部会委員	河村百合子	犬山市立犬山幼稚園長
専門部会委員	鈴木美幸	西尾市立鶴城幼稚園長
専門部会委員	大谷喜久子	愛知県私立幼稚園連盟常任理事 (みちる幼稚園長)
専門部会委員	今東優貴代	小牧市立小木保育園長
専門部会委員	畠山智子	豊田市立駒場こども園長
専門部会委員	堀井千代子	かわさき保育園長 (名古屋市)
専門部会委員	真山恵	半田市立乙川東小学校長
専門部会委員	本多宣子	幸田町立豊坂小学校長
専門部会委員	辻崎耕太	愛知県福祉局子育て支援課主任
専門部会委員	稲吉直樹	愛知県教育委員会生涯学習課主任社会教育主事

令和元年度 愛知県幼児教育研究協議会 事務局名簿(愛知県教育委員会)

小林整次	学習教育部長	伊藤克仁	義務教育課長
伊藤孝明	義務教育課主幹	廣瀧千枝	義務教育課課長補佐
吉田祐示	義務教育課課長補佐	山上高弘	義務教育課主査
福庭千晶	義務教育課主査	尾崎淳一	特別支援教育課主査
松川文香	総合教育センター基本研修室主査	宮本奈津子	義務教育課指導主事

愛知県幼児教育研究協議会のあゆみ（昭和47年度～平成16年度）

年度	経	過
昭47	・協議会の設置	
48	・「幼児教育の指針」の作成	
49	・協議題 4・5歳児の教育(保育)内容を中心に	(答申)
50	・協議題 幼児教育と小学校教育の在り方とその連携	(中間報告)
52	・協議題 今後における幼稚園と保育所の関係について	(報告)
53	・協議題 幼・保の教育(保育)と家庭教育との連携	(中間報告)
54	・協議題 幼稚園・保育所と家庭との連携	(報告)
55	・協議題 幼児教育の充実を目指す指導の在り方	(中間報告)
56		(報告)
57	・協議題 幼児教育に関する今日的課題	(中間報告)
58		(報告)
59	・協議題 幼児の生活実態とその問題点	(報告)
60	・協議題 幼稚園・保育所における望ましいしつけの在り方	(報告)
61	・協議題 家庭の教育力回復のために幼児教育機関の果たす役割	(報告)
62	・協議題 幼児教育のための保育者の資質向上の在り方	(報告)
	・現職教育資料 「保育者としてこれだけは」	(発刊)
63	・協議題 人との関わりをもつ力の育成	(中間報告)
平元	〃	(報告)
	・現職教育資料 「人との関わりをもつ力の育成」	(発刊)
2	・協議題 自然との触れ合いや身近な環境との関わり合いについて	(中間報告)
3	〃	(報告)
4	・協議題 基本的な生活行動を主体的に身に付けるために	(実態調査)
5	〃	(中間報告)
6	〃	(報告)
	・現職教育資料「基本的な生活行動を主体的に身に付けるために」	(発刊)
7	・協議題 一人一人の幼児の特性や発達の課題に応じた教育・保育の在り方	(実態調査)
8	〃	(中間報告)
9	〃	(報告)
	・現職教育資料「私たちの園にふさわしい教育課程・保育計画」	(発刊)
10	・協議題 心豊かな幼児の育成を目指して	(実態調査)
11	〃	(中間報告)
12	〃	(報告)
	・現職教育資料「保育のポイント Q&A50」	(発刊)
13	・協議題 幼児の心を豊かにする幼稚園・保育所と家庭との連携の在り方	(実態調査)
14		(報告)
15	・協議題 子どもたちのすこやかな育ちを支える幼稚園・保育所と小学校の連携の在り方	(実態調査)
16		(報告)

愛知県幼児教育研究協議会のあゆみ（平成17年度～令和元年度）

年度	経	過
17	・協議題 幼児期における心の教育 －「命」を感じる教育を考える－	(実態調査)
18		(報告)
19	・協議題 協同的な活動を通して、幼児期の「遊び・学び・育ち」を考える	(実態調査)
20		(報告)
21	・協議題 子どもや社会の変化に対応した教育課程・保育課程 －伝え合う力や規範意識の芽生えを培う体験を重視して－	(実態調査)
22		(報告)
23	・協議題 愛知県のこれからの幼児教育の在り方を考える －幼児教育の指針の策定に向けて－	(報告)
24	・協議題 小学校教育を見通した幼児期の教育を考える －接続期における教育課程・保育課程の編成に向けて－	(中間報告)
25		(報告)
26	・協議題 幼児教育の充実に向けた保育者の資質と専門性の向上について	(中間報告)
27		(報告)
28	・協議題 生涯にわたる学びを支える幼児教育の在り方 －幼児期における「学びに向かう力」の育成を通して－	(リーフレット理論編)
29		(報告)
30	・協議題 幼児期の育ちを支える幼稚園・保育所・認定こども園と家庭との連携の在り方 について－「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして－	(報告)
令元	・協議題 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる学びの芽を捉える －「自然との関わり・生命尊重」の姿に視点を当てて－	(報告)

令和元年度 報告

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながる学びの芽を捉える
－「自然との関わり・生命尊重」の姿に視点を当てて－

令和2年3月発行

愛知県幼児教育研究協議会

愛知県教育委員会

(事務局)

愛知県教育委員会義務教育課

〒460-8534 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号

電話 052(961)2111 (県庁代表)

(複写印刷可)

愛知県教育委員会義務教育課のWebページにて掲載

<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/gimukyoiku/>